

岩手県中央家畜保健衛生所 試験調査レポート

平成 24 年度 分野：伝染病診断・ウイルス 家畜：牛 担当：福成、八重樫

品種間における牛ウイルス性下痢ウイルスの感染要因

【 目的 】

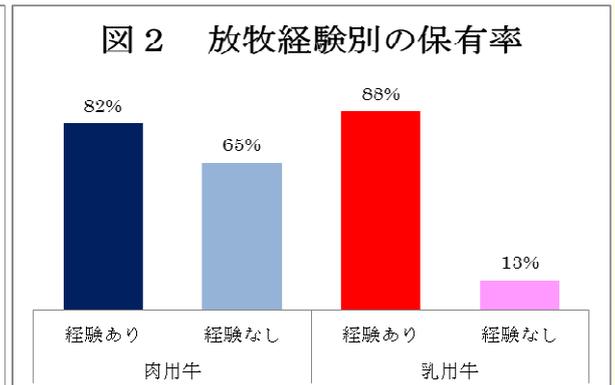
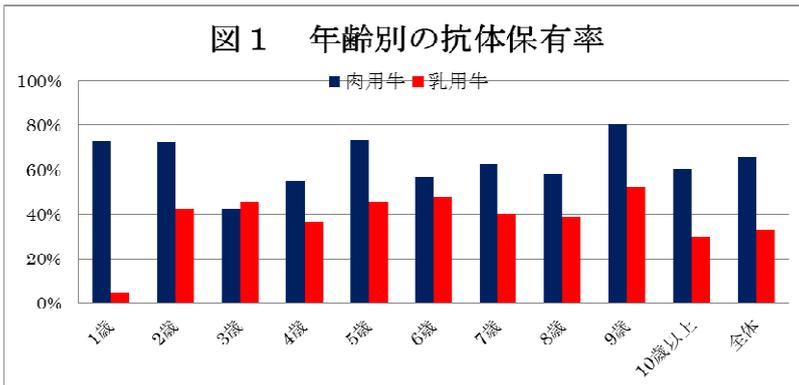
県内で摘発された牛ウイルス性下痢ウイルス（BVDV）の持続感染（PI）牛は酪農場で生産された牛が 8 割を占め、品種間で摘発頭数に差が生じていることから、その要因を明らかにするため、BVDV 抗体保有率の調査を実施しました。

【 成績の概要 】

- **材料及び方法**：農場飼養牛 1,274 頭（黒毛和種：20 戸 329 頭、ホルスタイン種：19 戸 945 頭）を検索しました。有効抗体価を感染・発症防御に必要な 16 倍以上として、保有率と品種・年齢・導入歴・放牧経験の各項目とを比較しました。
- **結果及びまとめ**：乳用牛の保有率(33%)は、肉用繁殖牛(65%)に比べて低く、1 歳齢(4.3%)、放牧経験の無い牛(13%)では特に低率でした（図 1、2）。導入された肉用繁殖牛(77%)及び放牧経験のある乳用牛(88%)で保有率は高率でした（図 2）。乳用牛の利用牧野では BVDV を含むワクチン接種が実施されていました。

1 歳齢で保有率に差があった要因は、肉用導入牛は子牛市場出荷のためのワクチン接種が義務化されていること、乳用牛ではワクチン接種の機会が少なく免疫を獲得する率が低いことが要因と考えられ、その結果、県内における PI 牛の摘発頭数に品種間の差が生じたことが示唆されました。

以上から、乳用牛育成牛へのワクチン接種率向上が本病の拡大を防ぐために重要と考えられました。ワクチン接種方法については、当所または診療獣医師にお問い合わせください。



【 成績の活用 】

BVDV 防疫対策、ワクチン接種の啓発に活用。